

第九回 鎌倉文学館こども文学賞 作品集

応募総数

小学生の部	252作品
中学生の部	1020作品

審査委員

三木卓（作家・詩人）

角野栄子（童話作家）

富岡幸一郎（文芸評論家・鎌倉文学館館長）

自分の眼で 自分の心で

三木 卓

今年は中学生の応募がとても多く、心強いものを感じました。詩を書くということは、自分の眼で世界を見るということです。自分の心で世界を感じるということです。そのとき、世界はありきたりの顔を捨てて、あなただけが知る新しい顔を見せてくれます。

小学生の部の大賞は、精華小学校二年の大澤啓悟君「ぼくは海」にきました。人間はふつうは陸を歩いています。泳ぎたくてたまらなくなることがあります。大澤君は海で泳いでいるときに、自分の中にいろいろなお魚や海藻が生きていて、いっしょに泳いでくれているという感覚を味わいました。すばらしい発見です。遠い遠い昔、生物は海の中から陸へ上って進化をつづけ、今の人間はその進化の頂点にいます。海はだから懐かしいふるさとなのです。

同じく精華小学校二年の井深太郎君「まっていた」は人生への期待をドキドキする思いで書いた、少年の心臓の音が聞こえてくるような詩。清泉小学校三年蝦名愛々璃さん「半分のわたし」は、新型コロナ・ウイルスのために自由に他者と交流できなくなっていることを、率直に述べていて〈半分〉という言葉になまなましい意味を与えてくれます。

中学生の部の大賞は聖園女学院中学校の遠藤瑞佳さんの「虚無」。あるときの心の状態を廃屋にたとえ、その誰もいない廃屋に小鳥が一匹ちよつと寄ってくれたので、小屋が柔らかな光に包まれる、というもので、心のよるこびへの変化が語られています。詩情にあふれた高度な作品です。

遠藤さんは二年前西鎌倉小五年のときにも「音」という細やかな感性を示す詩をこのコンクールに送って来て大賞を得た人です。これはとてもうれしいことでした。

鎌倉女学院中学校二年唐木麻衣亜さんの「逆上がり」は状況の描写が生き生きとしていて、わたしが逆上りをしているようでした。京都教育大学附属京都小中学第九学年の下元梨夏子さん「大暑逃がれ入院中の祖父を想う」は、お祖父さんへのやさしさにあふれていて、八十五歳になる評者は、とてもうれしかったです。

こども文学賞

大賞

小学生の部 大賞 「ぼくは海」

精華小学校2年 大澤^{おおさわ} 啓悟^{けいご}さん

ザッパーン

ぼくはゆつくりとなみをゆらす
のんびりおよぐ、くじらのために

ザッパーン

ぼくはすばやくからだをゆらす
ぐんぐんおよぐマグロのために

ザッパーン

ぼくは大きくからだをゆらす
ゆらゆらゆれるコンブのために

ぼくの中には たく山の生きものたちが
すんでいる

七色の大きなベラ

むれをつくる小イワシ

そしてふしぎな形のくらげたち

たく山の生きものたちのために
ぼくはからだをたく山ゆらす

中学生の部 大賞 「虚無」

聖園女学院中学校1年 遠藤 瑞佳さん
えんどう みずか

誰もいない廃屋に

光と影が

くるりくるりと交わりながら入ってくる

しんと静まり返った廃屋に

ぬるい夏の風が

ふわりと漂ってくる

一匹

群れから逸れた小鳥が

飛びこんできたけれど

この生きているものがない空間に

耐えかねて

すぐに出ていった

光と影と

夏の風

何もないけれど

誰もいない廃屋は

柔らかな光に包まれていた

小学生の部
入賞

入賞 「まっていた」

精華小学校2年 井深 太郎さん

ぼくをうむのをまっていた

ぼくとであうのをまっていた

ぼくとねるのをまっていた

ぼくとあそぶのをまっていた

ぼくとたべるのをまっていた

ぼくとてをつなぐのをまっていた

ぼくとあるくのをまっていた

ぼくとしゃべるのをまっていた

ぼくとはしるのをまっていた

ぼくのちからになるのをまっていた

ぼくとかんがえるのをまっていた

ぼくのせかいをまっていた

入賞 「アブ」

鎌倉市立富士塚小学校2年

松田

薫さん

アブがにわでセミをつかまえました
ガシんとつかんでいます

ぼくはまどをボタンとしました
そうして、にわをながめました

小さなアブがおそろしかった
セミににげてほしかった

アブがかみついていました
セミはもう
はねをうごかしません

ミ・ミ・ミ・ミ・ミ
とだけなきました

ぼくは見るのをやめました

いつのまにか
アブもセミもいなくなっていました

入賞 「ぼくのまいごの川サンダル」

精華小学校2年 目黒^{めぐろ} 恵都^{けいと}さん

キャンプに行った

川へ行った

川の水がキラキラしていた

川に入ったら つめたかった

あたらしいサンダル

ぼくのサンダル

「つめたい！」

つと言ってるみたいだった

川のいきおいにまけないように

ぼくもサンダルといっしょに

ザブザブあるいた

ぼくもまけない

ぼくの川サンダルもまけない

でもサンダルのかたつぼが

まいごになった

どんだんがされた

かなしかった

もうかたほうのサンダルも

かなしいと思った

サンダルがちよつとずつ

ぼくの足からはなれていくのが

わかったけど

川のながれがつよすぎて

たすけられなかった

ごめんね ぼくのサンダル

ぼくが もっとがんばったら

まいごにならなかったかも

サンダルはふたごだったけど

一人になっちゃった

キャンプでかわりのサンダルを

かりたけど

ちっともうれしくなかった

ぼくのサンダルどこ行った

まいごのサンダルどこ行った

サンダルどこ行った

入賞 「半分のわたし」

清泉小学校3年 蝦名^{えびな} 愛々璃^{あめり}さん

世界中がとつぜん悲しみにつつまれた

人が人にさわってはいけない

人と話してはいけない

人と会ってはいけない

こんなに悲しいびよう気に出会って

わたしは気づいてしまった

人は人にさわってやさしくできていたことを

友だちと半分の顔と半分のやさしさで

あいさつする朝

わらっているのか

おこっているのか

半分の顔じゃちっともわからない

半分しかつたわからない

友だちが大じな気もち

友だちが大すきな気もち

悪いゆめからさめたら

また友だちにわたしの

すきな本をかしてあげよう

また友だちとせ中を合わせて

いっしょに遊ぼう

そばに行けない

大すきな人をまもるために

心だけでも近くにいたいのに
今はじつとがまん

さわれない親切

さわれないやさしさ

さわれない気もち

半分のわたしは

もう半分のわたしをとりもどしたい

半分の友だちもとりもどしたい

この悲しい生活がゆめでありますように

入賞 「空にそばかす」

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校3年

小野^{おの} 登子^{とうこ}さん

空に鳥がとんでいる。

何十羽も、何百羽も、

とんでいる。

かたまつてとび鳥は、

まるでそばかす。

青い青い大きな顔に

ぐるぐる

動く

そばかす。

入賞 「木たちの詩」

トキワ松学園小学校3年 鏑木 邦賢さん

私のドングリ

ちっちゃくて かわいいドングリ

こまかいネットのぼうし

おしゃれな工作につかってね

ユナラ

わしのドングリ

大きくて 丸いドングリ

体はほこぼこ

さわるとあたたかい

だからさむい日にだきつくのじゃ

クヌギ

私の葉っぱ

もこもこ おもしろい葉っぱ

かしわもちをつつんであげる

だから私は五月五日がすき

カシワ

ぼくのドングリ

かわったドングリ

だって三角形なんだもん

ぼくの体は つるつる

雨の水をはだにながして

ためておく

あとで いつでも飲めるように

だから体がひんやりしている

あつい日は ぼくにだきついて

ブナ

入賞 「タガメ、ラッキー」

精華小学校3年 吉田^{よしだ}礼^{れい}さん

おれはタガメ

おれはラッキー

なぜかというと

すめる場所が少ないし

おれたちをとろうとする

やつが一ぱいだから

しかもゲンゴロウのよう虫のやつらに

くわれてしまうから

おれはせい虫

おれ大人

池の中ではハンターだ

だがもう一びきハンターがいる

そいつはゲンゴロウのやつだ

おれはトノサマガエルにカメやヘビなど

いろいろなちをすうぜ

魚がいたらすぐにすう

人間が来たらずぐにげる

それがおれの仕事

それからけっこん相手をさがさなきや

魚がいた

じゃあな

入賞 「四年生」

清泉小学校4年 野田^の花音^ださん^か

五月、

オンラインで友だちに会う。

「ぼく、三年生や。」

久しぶりに聞く関西弁。

「ちやうでー、四年生や。」

「えっ、学校行ってないから、まだ三年生や。」

みんなで大笑いした。

二月の終わり、

とつぜんの休校の知らせ。

三月、

ニュースはいつも同じ、

ステイホーム。

四月、

車から見るお花見、

新入生を想う。

五月、

オンライン朝の会が始まる。

六月、

三ヶ月ぶりの学校。

マスクが照れくさい私をかくす。

「おはよう。」

いつもの友だちの声、
マスクごしでもわかる笑顔。

ようやく席につく。

景色が変わった窓の外、

遠くに大小の緑の山々。

クスツと笑いがこみ上げる。

「大丈夫、今日からたしかに四年生や。」

きんちょうがとけていく。

入賞 「あの日の線香花火」

鎌倉市立西鎌倉小学校5年 大里 おおさと 怜 れん さん

火に先がふれると

速く しかし静かに燃え盛る

そしてさつきまで枝の様に細かった先は

橙色の丸い灯になりかわるのであった

するとその灯火から火花が舞いはじめ

次第にいきおいを増やしていくではないか

わたしはこの情景に 懐かしさと

はかなさと美しさを感じた

しばらく火花は舞っていた

わたしもずっと見とれてたそのとき

びゅうと つよい風がふいた！

灯火が飛ばされたと思ひ火花を見てみる

が なんとか火花はたえていたのだ

「あんな強い敵に攻撃されても

ガマン強くたえられるなんて！」

火花はまだ火花を散らし続けている

それが「まだ生きるぞ」という心強さを

感じさせられるのであった

そしてわたしは

「この力強い火花のように

生きてみせるぞ！」

という強さを この火花からもらえた

この火花を見た後でも

静寂で美しくはかなく でも心強く灯った

あの線香花火を忘れることはない

それは今もだー

入賞 「俺の気持ち」

鎌倉市立御成小学校6年 樋口 琉生さん

いつもの友達と

いつもと同じ話をしてるのに

伝わってない気がして

もう一度言ってみる

たった一枚のマスクなのに

じーっと目を見て

ビームを送る

うけとってくれ

俺の気持ち

中学生の部
入賞

入賞 「吹奏」

東海大学付属相模高等学校中等部1年

日下くさか

光さんひかる

体全体がとける
限らない時間
地獄のポイント
全力の呼吸
にじんできると汗
思いに残る体育館
夏を満喫する日
足の筋とれ
足底の筋肉
何人かが離脱
何人か脱落
誰かが力尽きる
だが、練習が楽しい
弁当は神様だった
最強の歩幅
姿勢を作る
繰り返される歩幅
これで足の筋肉発達
行進の準備
一致団結
最高の感覚
やり切る気持ち良さ
楽器を持ち行進
終わりのミーティング
神のクーリッシュユ

終わりの風景

飛んでいくアシナガバチ

相模線の窓

夕日を眺める

今日、最高の夏を満喫した。

入賞 「思い球」

東海大学付属相模高等学校中等部1年 佐々 波琥さん

思いを込めたその一球が
ゴールネットをゆらした時
仲間達は笑顔と歓喜に満ちあふれ
僕の心は爽快感で満たされる
始めた理由は特にな
幼心の興味本位の習い事
今となっては僕にとって
かけがえのない宝物
僕が僕であるために
欠かす事の出来ない存在
プロになりたいのかと問われると
うなずける程の無邪気な僕はもういない
将来の事なんてわからない
何のために続けているのか
理由なんか考えない
楽しい事ばかりじゃない
苦しい事も沢山ある
それでも僕はその一球に
思いの全てを込めて蹴る
仲間と共に汗を流し
共に喜び
時に悔し涙を流しながら
僕は今も走り続ける
思いを込めたその一球が
ゴールネットをゆらすまで

入賞 「不思議」

リンデンホールスクール中高学部1年 本田^{ほんだ}健人^{けんと}さん

田植えの頃

近くの田んぼで大合唱している蛙

夜眠れないほどだ

突然何の前触れもなく

一匹も外すことなく

一斉にピタッと鳴き声が止まり静まり返る

仕切り屋のボスがこっそり合図をしているのだろうか

不思議だ

真夏の午後

ベランダの物干し竿の陰にとまる二匹の蜂

毎日欠かさず現れる

巣を作るわけでもなく

花の蜜を吸うわけでもなく

陰で涼むにしてももっと涼しい所はあるだろう

なぜ他の家のベランダと間違わず迷わずに飛んで来られるのだろうか

不思議だ

世界中が未知のウイルスと戦っている頃

隣の家に生まれた赤ちゃん

僕と一緒に住んでいる年老いた病気の祖母

何か事件があつたわけでもなく

ウイルスに感染したわけでもなく

いつもと変わらない毎日なのに命について考える

人はどこから生まれてきて死んだらどこへ行くのだろうか

不思議だ

いつもと違う夏休み

中学生になった僕

少し前まではこんなことを考えたこともなかった

自分で意識したわけでもなく

人に言われたわけでもなく

心の中は目に見えないからなかなか気付かない

これが成長というものだろうか

本当に不思議だ

入賞 「逆上がり」

鎌倉女学院中学校2年 唐木 麻衣亜さん

僕は泣いた弱い自分に

何度も何度も起き上がる

足は空を嫌っていた

僕は泣いた筋肉痛の痛さに

無理しないでねと母は言う

何も言わずに父は見守る

僕は笑った雲の形に

何もないと思っていたあの広い空に

くつきりと

足はもぞもぞと空を見たいと言っている

僕の足は軽かった

あの広い空に興味があるかのように

僕は泣いた 風光る公園で

天地がひっくり返ったことと

気付けば鉄棒に身を任せていたことに

入賞 「美しい空」

星美学園中学校3年
石橋 満里奈さん

いしはし

まりな

あの吸いこまれるような美しい空は
色鉛筆で青色ぬれば

もう一度

もう一回

見ることができますか

あの燃え盛るような美しい空は

水彩絵の具で赤色ぬれば

もう一度

もう一回

見ることができますか

あの深い海のような美しい空は

油彩絵の具で紺色ぬれば

もう一度

もう一回

見ることができますか

あの空は

いくらぬっても

同じものは作れない

いくらぬっても

綺麗だけど美しくはない

あの空は

ひとときだからこそ美しい

はるか高みにあるからこそ美しい

入賞 「蠟燭」

洗足学園中学校3年 管^{かん}真結子^{まゆこ}さん

ケーキの蠟燭の火を

十本

吹き消した

弟が生まれて十年

祖母が亡くなって十年

一瞬真つ暗になる部屋の中

永遠には灯らず

また偶然の中で灯る

命の火が

揺れる

弟が生まれ抱いたときのことを覚えている

祖母と最後に会ったときのことを覚えていない

十年前の

同じ四月のこと

弟が泣きながら抱かれている姿を覚えている

祖母がベッドで涙を流した姿を覚えている

よく似た

春の白い部屋の中で

祖父の家を訪れ

弟とお線香に火を点ける

写真の中の微笑む祖母は
甘い香りのあのドレッサーで化粧したのか
とても綺麗だ

お墓参りに行き

祖母の好きな

火のように赤い大輪の花をお供えする

弟は

会ったことのない祖母に手を合わせる

弟のケーキの蠟燭の火が

灯るほどに

私の記憶の中の祖母が

その煙に包まれ

白く遠く見えなくなる

そうして

今年もまた

蠟燭の火が一つ増える

入賞 「追憶」

立命館慶祥中学校3年 小島 こじま なごみさん

あっけない終わりだった

散々に傷つけられて

薄れゆく意識の中

降りしきる雨に濡れて

彷徨える身はやがて溺れる

許せないと言いながらも

心のどこかで微かに反芻している

あの頃の記憶に取り残されて

届かない想いを引きずりながら

零れ落ちてゆく幸せ

寒さに悴んだ手のひら

走り書きの跡を綺麗に消して

断崖の端で叫べとて

叶う気がしてならなかった

刺さったまま取れないナイフ

交錯する記憶の中で

黄昏の芳しさ

暗闇のぬくもり

惑わせる何かがあって

心に煙が立ち込めた

一筋の光に入りそびれ

いつまでも四角い空を眺めて

心に響くものは何一つなく

別々の世界に生きていた
手を伸ばそうにも伸ばせず
不安だけが取り巻く
引き裂かれるような音

あっけない終わりだった
散々に傷つけられて
皺を残して乾いたシャツ
されど未だ朝は来ない
ただひたすら自分の涙を
自分の足で踏みしめていた

入賞 「大暑逃れ入院中の祖父を想う」

京都教育大学附属京都小中学校第9学年 下元 しももと 梨夏子 りかこ さん

コロナ禍で会えない祖父を案じている

一緒に暮らしていた時は

朝昼晩を分からずふらふらと出歩き

食事をしても食べてないと言ひ

喉に詰まって食べられないのに外食したがる

歯医者に連れていこうとすると

追い出されるように退院した「あの病院に行くんや」と言い張る

だから私は何度も何度も説明する

「なんでや」「なんでや」と話をきかない

分からず屋の三歳児のように

その夜祖父は言う

「爆弾落とされるから電気はつけんといて

まだ戦争が続いてると思ってる人がいるから」

おちおちご飯も食べてられない

そしてお風呂から出てきた母に言う

「あんなことするのやめて

僕のお金盗らんといて」

と吐き捨てるように

母は聞く

「どこでどんな風にされたん」

「分からの

ぼけてんのちゃう」と父は怒る

そして母と私で祖父の財布を探す

久しぶりの涼みのある夕方

ハーモニカを三歳の孫に聴かせている祖父はほほえましい

これからはもっとしゃべってあげよう

そして私は祈る

このような穏やかな日が続きますように

入賞「風魚之災」

京都教育大学附属京都小中学校第9学年

白石^{しらいし}

奈々^{なな}さん

新型コロナがやってきた

春の遠足

合唱コン

球技大会

なくなって

代わりにワニが家にいる

ワニは毎日リモート勤務

我が物顔で我が家を占居

黒いパソコン動かして

赤い紐引き簾を下ろし

誰もいない静かな部屋で

時々誰かを怒ってる

食事したら

陽色に染まる部屋の中

緑の畳でゴロンと寝転び

スマホゲームで笑ってる

まだ食事さえしていないママが

ワニのお皿を洗う水音

5時になったら仕事が終わる

ワニはゲームを始める時間

自分が入りたい時お風呂に入り

自分が寝たい時に寝る

口から出るのは

嫌な言葉

「自分ばかり」と訴える

朝から働き通しのママが

深夜にもらす小さなため息

ある晩私が勉強していると

ワニが文句を言ってきた

「勉強は昼間にしろ」

ゲームに集中できないらしい

「昼も勉強してる」と言い返すと

「出て行け」と言う

立派な身体を作るために

私は毎日運動をしている

立派な心を作るために

私は毎日言葉を紡いでいる

立派な人間になるために

私は毎日勉強している

ワニは言葉の暴力を知らない

ワニは「我慢」を知らない

だって、ワニだから

私はワニにはならない

私は人間になるんだ

入賞 「城」

港区立赤坂中学校3年 鈴木 清吾さん

何でもないことから

どこにもないことを考えた。

ただ考えただけなのに

それはどこにもないこと。

だってあなたが考えたことは、

あなたしか思い付かないことだから。

あなた以外思い付かない idea だから。

何でもないものから

どこにもないものをつくった。

ただつくっただけなのに

それはどこにもないもの。

だってあなたがつくったものは

あなたしかつくれないものだから。

いろんなものをつくりたい。

立ててみたり、

壊してみたり。

一つ一つのカタチが、変でも、見えなくても

積み木のように積み重なれば、

きっと美しいカタチになる。

未来はどんなカタチだろう？

それは誰にも分からない。

だから皆で「未来」っていう城を
築き上げていこう。

今は目に見えないけれど、

いつかは見えるときがくるから。